

毛利元就の自筆書状

毛利元就（1497～1571）は、安芸国高田郡吉田（現、広島県安芸高田市）を本拠とした戦国大名です。一代で、安芸国の山間部の一国人領主に過ぎなかった毛利家を、中国地方8ヶ国を支配する大大名に押し上げます。萩藩の藩祖であり、毛利家中興の祖ともいえる人物です。本年は、ちょうど元就没後450年にあたります。

今回の展示では、当館所蔵史料の中から、毛利元就の自筆書状を紹介します。書は人となりを表すと言われます。元就の筆跡から、元就とはどんな人だったのかについて、あれこれ想像をめぐらすのも面白いかもしれません。

【展示リスト】

※途中で展示替をします。

番号	史料名	請求番号	11/27～12/7	12/8～17	12/18～26
①	毛利元就自筆書状	複写資料275(3)	○		
②	毛利元就自筆書状	複写資料140		○	
③	毛利元就自筆書状	複写資料424			○

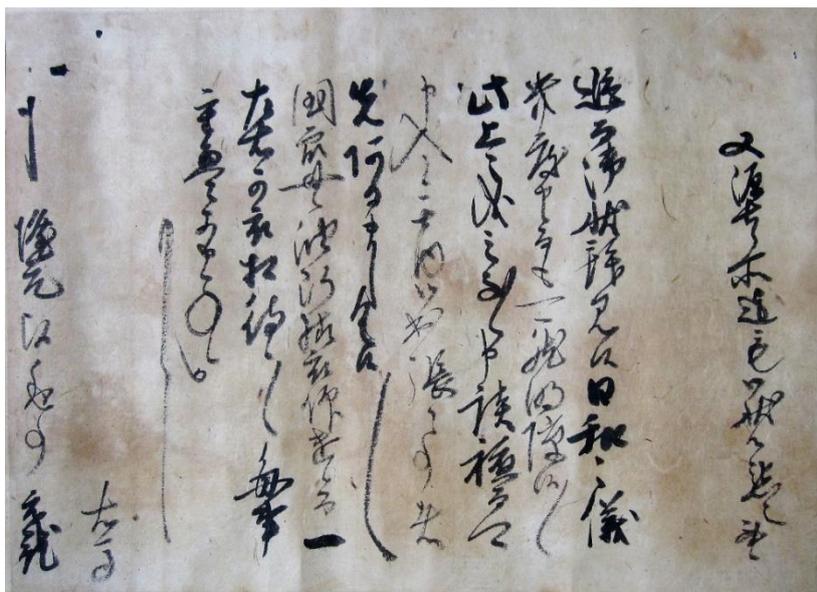
毛利元就自筆書状の特徴

- ① 日付がない
- ② 花押を据えていない
- ③ 身内あてが多い
- ④ 行間が狭い
- ⑤ 繰り返し記号を多用

※もちろん例外はあり。筆跡その他も加味して総合的に判断！



毛利元就肖像（軸物類 170）



① 毛利元就自筆書状

縦 27・0、横 37・5 cm

楮紙

右田毛利家文書

又、源七郎所迄も御状御懇之至候、
(平佐就之)
(石見国邑智郡)

追而御状拝見候、日和之儀、

幾度申候而も可然明隙候く、

此上之儀みなく申談、聽而可

申入候、其内御出張之事者、

先あるましく候く、

国衆無油断様被仰遣候而、一

左右可被相待候く、毎時

重畳可申承候、

かしく、
(捺封ウハ書)

右馬

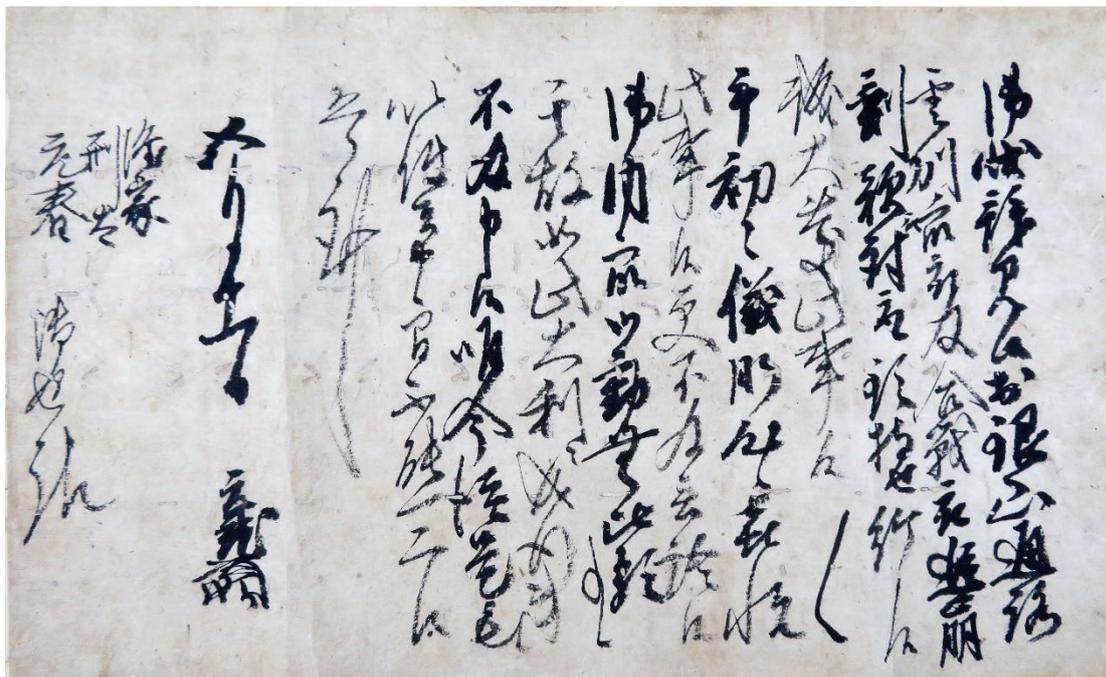
(墨引) 隆元まいる御返事 元就

【解説】

毛利元就(一四九七〜一五七二)が、息子で毛利家当主である隆元(一五二三〜一六三)に宛てて、石見国日和(現、島根県邑智郡邑南町)の件について考えを述べた文書。典型的な自筆書状であるため、花押も日付も欠くが、毛利氏が石見へ本格的に勢力を伸ばしていく天文末年から隆元が没する永祿六年までの時期に出されたものと考えられる。当時、日和は石見有力国人の福屋隆兼の勢力下にあつた。したがって、「日和之儀」とは日和に関わる福屋氏との何らかのやりとりを指すのであろう。

【大意】

手紙は拝見した。日和(現、島根県邑智郡邑南町)については何度申しても時間ができてからでよいだろう。これからのことは皆で相談の上、そちらへ言うつもりだ。軍勢を出すような事態にはならないだろう。有力な領主たちに油断しないようにおっしゃって、知らせを待たれるべきだ。いつでも繰り返しお話をうかがうつもりだ。(追伸)平佐就之の所へも手紙をいただいたのは御丁寧なことだ。



② 毛利元就自筆書状

縦 25・3、横 40・8 cm

楮紙

宍戸家文書

御状拝見候、於銀山通路(石見国瀧摩郡 尼子氏)

雲州衆被及合戦被追崩、

剩敵討取頸持せ給候、

誠大慶此事候、

手初之儀肝心候、喜悅

此事候、更不及言語候、

御内衆御動無比類事候、

其故如此大利ニ成行事候、

不及申候、唯今従是も

以使者申候間、不能一二候、

恐々謹言、

五月廿一日 元就 (花押)

隆家

刑太

元春

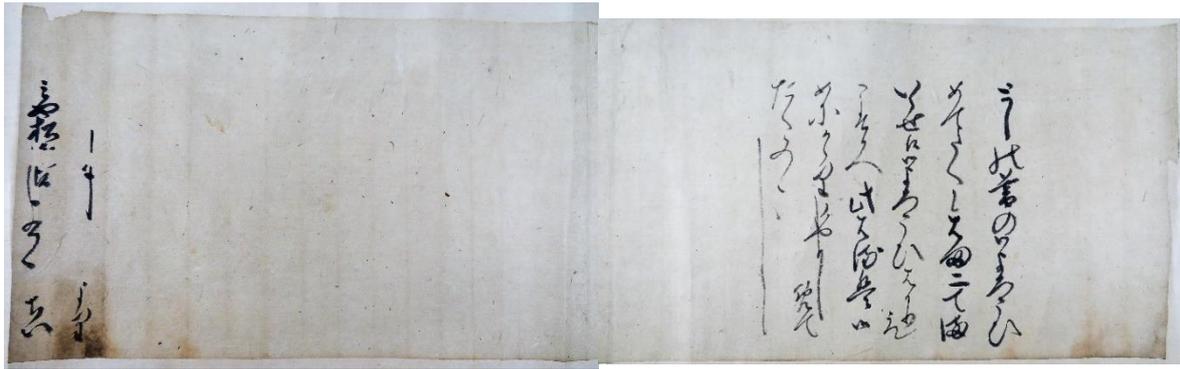
御返報

【解説】

毛利元就(一四九七〜一五七一)が、宍戸隆家(娘婿)・口羽通良(一門・重臣)・吉川元春(次男、一五三〇〜八六)に宛てて、石見銀山(現、島根県大田市)の争奪戦で勝利したことを褒めた文書。自筆書状ながら、花押も日付も書いてあるのは、元就と宍戸らが離れた場所にいるためと考えられる。

【大意】

手紙は拝見した。石見銀山(現、島根県大田市)の通路で尼子方と合戦をして追い散らしただけでなく、敵を討ち取り、その首を使者に持たせられた。誠にこの上なくめでたいことだ。最初が肝心なので言葉にならないくらい喜ばしい。御家来の働きは比べるものがないほどなので、大勝利になったのだろう。こちらからも使者を送るので、詳しいことは省く。



③ 毛利元就自筆書状

(第一紙) 縦 29・5、横 40・8 cm
(第二紙) 縦 29・5、横 40・8 cm

楮紙 阿川毛利家文書

^(歳) としの暮の御よろこひ
めてたく候、^(破魔) はまにてま^(二手)
いらせ候、御よろこびはかりにて
こそ候へ、此はるは御
めにかゝり候へく候、めて
たく又々

かしく、

「^(第二紙切封ウハ書)
^(墨引)

より

^(仁保元棟、繁澤元氏)
みや松□まいる

ちい

申給へ

「

【大意】

無事に年の暮を迎えられたのはめでたいことだ。お祝いとして破魔矢を二組贈る。年が明けたら会いたいと思っている。

【解説】

毛利元就（一四九七〜一五七二）が、孫のみや松（吉川元春次男。仁保元棟、のち繁沢元氏。一五五六〜一六三二）にお祝いとして破魔矢を二組贈り、来春（正月）には会おうと伝えたもの。「ちい（爺）」と署名した自筆の手紙。